

小学校 国語

国語科の読むことの学習において、  
文章の要点を捉えてまとめる力を育成する指導法の工夫  
－「言葉の系統表」を活用した言語活動を通して－

東通村立東通小学校 教諭 竹林 千亜紀

要 旨

本研究は、読むことの学習において、文章の要点を捉えてまとめる力を育成する指導の在り方について探ったものである。国語科における各領域間の関連する指導事項を意図的・継続的に指導しながら、読み取った内容及び「自分の考え」を書く際、「言葉の系統表」を活用させた。その結果、児童は要点を捉えて文章を短くし、適切な言葉を使って自分の考えを表現することができるようになった。

キーワード：小学校 国語 読むこと 要点 まとめる 言語活動

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）の国語においては、「C 読むこと」の説明的な文章の解釈に関する指導事項として、各学年の系統を次のように示している。

[第1学年及び第2学年]

C(1) イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。

[第3学年及び第4学年]

C(1) イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。

[第5学年及び第6学年]

C(1) ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。

さらに、自分の考えの形成及び交流に関する指導事項として、次の項目を示している。

[第1学年及び第2学年]

C(1) エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。

[第3学年及び第4学年]

C(1) エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。

国立教育政策研究所がまとめた「平成26年度全国学力・学習状況調査報告」では、国語科における各領域の課題として次の点を挙げている。

[話すこと・聞くこと]

・司会の役割として話合いの観点を整理したり、質問の意図を捉えたりすることに課題がある。

[書くこと]

・物語を創作する際、情景描写の効果を捉えることに課題があり、指導の充実が求められる。

[読むこと]

・物語の登場人物の相互関係を捉えることに、依然として課題がある。

・詩の解釈における着眼点の違いを捉えることに課題があり、指導の充実が求められる。

また、青森県教育委員会がまとめた「平成26年度学習状況調査実施報告書」においては、「読むこと」・「読む能力」における課題として、次の点を挙げている。

・説明的な文章などを要約する力、目的や必要に応じた文章の読み取りや利用する力の向上。

同報告書ではこれに加え、説明的な文章における今後の指導について、「要点や細かい点に注意しながら要

約する力を身に付けさせるために、『文と文との関係を捉え、中心となる文を見つけられるようにすること』及び『何のために文章を読むのかという目標を設定し、その達成のために、教材文等から情報を取り出して再構成させたり、筆者の論の進め方を参考にして文章を書かせたりすること』が大切である」としている。

2年生である本学級においても、「説明的な文章における内容の理解」「文学的な文章における内容及び心情の理解」の二点に課題がある、という学力テストの結果が出ている。それらは、記述式の問題における無答の多さ、正答率の低さ（3割程度）に顕著である。

以上、全国、青森県、本学級の実態から見えてくる「読むこと」領域における課題は、次の二点にまとめられる。

○目的や必要に応じて、文章の内容を読み取る力が不足している。

○読み取った文章の内容から、大事なことを引用、要約したり、自分でまとめる力が不足している。

この二点は、他の領域における課題にも通じている。「要点を捉える」「必要に応じて」という言葉が共通するキーワードである。

そこで、本研究では、読むことの学習において、他の領域と関連させた意図的・継続的な指導を行う。その際、教科書に示されている各単元の指導事項を提示し、それぞれの学習のつながりが見えるようにする。さらに、「言葉の系統表」を活用させ、読み取った内容及び「自分の考え」を書く際のツールとする。これらの手立てが、文章の要点を捉えてまとめる力の育成につながると考え、本主題を設定した。

## II 研究目標

国語科の読むことの学習において、文章の要点を捉えてまとめる力を育成するために、教科書に示されている各単元の指導事項を他の領域とのつながりが見えるように提示して意図的・継続的に指導することと、読み取った内容及び「自分の考え」を書く際に「言葉の系統表」を活用させることが効果的であることを、実践を通して明らかにする。

## III 研究仮説

国語科の読むことの学習において、教科書に示されている各単元の指導事項を他の領域とのつながりが見えるように提示して意図的・継続的に指導し、読み取った内容をまとめたり自分の考えを書いたりする際に「言葉の系統表」を活用させることにより、文章の要点を捉えてまとめる力を育成することができるであろう。

## IV 研究の実際とその考察

### 1 研究における基本的な考え方

#### (1) 「文章の要点を捉えてまとめる力」について

本研究における「文章の要点を捉えてまとめる力」とは、次の二点を合わせたものとする。

①文章を読み、大事な言葉や文を書き抜いたり、文章を短くしたりする力

②読み取った内容について、適切な言葉で「自分の考え」を表現する力

なお、学習指導要領では、「読むこと」領域における「自分の考え」のことを、「本や文章を読んで、感じたことや思ったこと、考えたことなど」と示している。よって、「自分の考え」には、感想や意見が含まれるものとする。

#### (2) 「読むこと」領域と「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域の指導の関連について

「読むこと」領域において文章の要点を捉えてまとめる力を付けるためには、児童自身が身に付けてきた力を理解する必要があると考える。そこで、本研究では、各単元の指導事項を領域ごとに区別せず、それぞれの領域において共通するキーワードを取り上げながら提示する。また、この指導を年間を通じて繰り返し行っていくことで、各領域間で効果的な相互作用が生じると考える。

#### (3) 「言葉の系統表」の作成について

平成27年度版の各社の国語科教科書には、巻末の付録として「言葉あつめ」を掲載しているものが複数ある。本研究では、教育出版「ひろがる言葉」及び光村図書「小学校国語」の二つの教科書を参考に、文

章の要点をまとめることに有効な「言葉の系統表」を筆者自身が作成し、児童に活用させる。

本研究における言葉の系統の分類は次の三つとする。

- ①お話の中の登場人物について説明する言葉
- ②自分が見たり聞いたりして感じたことを相手に伝える言葉
- ③自分の気持ちを表す言葉

#### (4) モデル文の提示について

児童の実態を受けて、文章を短くする際のモデル文を準備する。

5月及び6月に「読むこと」の指導を行った際は、読み取った内容をワークシートに書かせていた。ワークシートを使用した理由は、大事な語句を押さえながら、順序よく文章を読む力を付けたいと考えたからである。その結果、全員が大事な語句を見付けることはできたが、文章を短くまとめる力の育成にはつなげていないことが、学習後の作文や単元末のテストから見えてきた。

そこで、本研究では、教材を学習後に文章を短くする段階でモデル文を児童に示す。そして、それを基に、大事な言葉や文を書き抜き、適切な言葉に書き換えた上で文章を短くする活動を行う。

## 2 検証方法

本研究では、同一の学級において、「読むこと」領域の指導をねらいとした単元を第1段階、第2段階に分けて行う。各段階では異なる教材を用いるが、本研究における手立ては第1段階から連続して投入しそれによる変容の結果を検証する。分析の方法は、以下のとおりである。

### (1) 文章の要点を捉えてまとめる力の分析

小学校学習指導要領解説国語編では、自分の考えをまとめるために、「文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと」を第1学年及び第2学年の読むことの指導事項として示している。さらに、第1学年及び第2学年における「大事な言葉や文を書き抜く」とは次のようなことであると説明している。

「時間や事柄の順序、場面の様子や登場人物の行動、文章の要点やあらすじなどにかかわって、文章の中で大事になる言葉や文、読み手が自分の思いや考えをもつことに強く影響した言葉や文、思いや考えを話したり書いたりするために必要となる言葉や文などを、適切に書き抜くということである。内容や表現からみて大事な言葉や文を書き抜くことは、理解を深めたり、自分の考えをまとめたりするときに役立つ。書き抜いた言葉や文について、感じたことや経験したこと、思ったことや考えたことなどを書き添えたり、それらの言葉や文を関係付けて整理したりすることが大切である。また、書き抜いたものに書き足したり、書き換えたりして、整理することへ発展させることも考えられる。」

そこで、本研究では、単元の終末に児童の書いた「まとめ」（文章を短くし、自分の考えを書き加えたもの）を次の二つの観点で分析した。

①文章を読み、大事な言葉や文を書き抜いたり、文章を短くしたりすることができたか。

②読み取った内容について適切な言葉で「自分の考え」を表現することができたか。

また、児童の変容がより分かるように、検証授業前に児童が書いた「まとめ」との比較も行った。

### (2) 意識アンケートの実施

本研究に関わる「読むこと」領域を中心に、国語科の学習に対する児童の意識アンケートを計2回行った。1回目は検証授業実施前の9月上旬、2回目は検証授業実施後の10月中旬に実施した。アンケートの内容は、表1に示したとおりである。

表1 国語の学習に対する意識アンケートの内容

	しつもん
1	国語のべんきょうがすきである。
2	国語のべんきょうで、話すことや聞くことがすきである。
3	国語のべんきょうで、書くことがすきである。
4	国語のべんきょうで、読むことがすきである。
5	せつめい文やものがたりを読んで、何が書いてあるのかだいたいわかる。
6	せつめい文やものがたりを読んで、わかったことや思ったことを自分でまとめることができる。

## 3 検証授業の実践

### (1) 単元の指導計画

9月下旬から10月上旬にかけて、「読むこと」領域の指導をねらいとした単元を第1段階、第2段階に分けて実施した。各段階では、それぞれ異なる説明的な文章の教材を一つずつ用いた。その指導計画が表2である。

表2 単元「写真を使って説明しよう」指導計画

	時	主な学習活動	評価規準	本研究との関連
第一段階 さけが 大きくなる まで	1	○題材名やリード文から、順序に気を付けて読むという学習の見通しをもつ。 ○全文を読み、問いの文を見付けて書き抜く。 ○学習計画を立てる。	さけの成長の過程に興味をもち、文章を読もうとしている。 【関・意・態】	◆既習事項との関連を確認
	2	○②③段落を読み、大人のさけが海から川へ行き、たまごを産む様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。	季節や場所、さけの大きさや様子など、情報を時系列で捉えるための手掛かりになる言葉に気をつけながら、文章を読んでいる。 【読むこと】	◆「言葉の系統表」の内容を確認、単語追加、チェック
	3	○④～⑥段落を読み、たまごから生まれたさけの赤ちゃんが川で成長する様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。		
	4	○⑦～⑩段落を読み、海での暮らしを経て、大きくなって生まれた川へ帰ってくるさけの様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。		
	5	○さけの成長を、写真を使って説明する。 ○本文を基に問いの文とそれに対する答えを短く書く。	さけの成長の過程と様子を、要点を捉えながら書いている。 【読むこと】	◆「書くこと領域」との関連 ◆「言葉の系統表」活用
第二段階 ほたるの 一生	6	○題材名やリード文から、「さけが大きくなるまで」の学習との類似点に気付き、順序に気を付けて読むという学習の見通しをもつ。 ○全文を読み、問いの文を見付けて書き抜く。 ○学習計画を立てる。	ほたるの一生に興味をもち、文章を読もうとしている。 【関・意・態】	◆既習事項との関連を確認
	7	○③～⑤段落を読み、おすとめすが結婚してたまごを産む様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。	時期や場所、ほたるの体の様子の变化やえさなど、情報を時系列で捉えるための手掛かりになる言葉に気を付けながら、文章を読んでいる。 【読むこと】	◆「言葉の系統表」への単語追加、チェック
	8	○⑥～⑨段落を読み、たまごから幼虫に成長する様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。		
	9	○⑩～⑫段落を読み、さなぎから成虫に成長する様子を、時間や場所を表す言葉に気を付けてカードに書く。		
	10	○ほたるの一生を、写真を使って説明する。 ○本文を基に問いの文とそれに対する答えを短く書く。	ほたるの一生を、要点を捉えながら書いている。 【読むこと】	◆「書くこと」領域との関連 ◆「言葉の系統表」活用
まとめ	11	○二つの題材から興味深かったものを一つ選び、成長の様子についての「自分の考え」を発表し合う。	さけの成長やほたるの一生について、「自分の考え」も加えて発表し合っている。 【読むこと】	◆「話すこと・聞くこと」領域との関連 ◆「言葉の系統表」活用

(2) 授業の実際と手立て

本単元では、「さけの成長やほたるの一生について、時間の順序に気を付けながら読むことができる」ことを目標に指導計画を立てた。単元全体を通した言語活動として、「写真を使って説明する」という活動を行った。

まず、第1段階の教材である「さけが大きくなるまで」では、さけの成長について、時間や場所、大きさや様子を表す言葉を手掛かりに順序よく読んでいく学習を行った。その際、既習の学習内容である「何ができる」の文型に気を付けて、順序よく読むことを意識させた。

次に、第2段階の教材である「ほたるの一生」では、「さけが大きくなるまで」で学んだことを基にその様子を順序よくカードに書かせ、写真を使って説明する活動を行わせた。

単元の最後には、それぞれの教材の問いの文に対する答えと、「自分の考え」を「まとめ」として書か

せた。その際、本研究における手立ての一つである「言葉の系統表」(表3)を活用させた。また、モデル文(表4)を提示し、活用させた。

表3 「言葉の系統表」より一部抜粋

「登場人物のことを説明する言葉」 やさしい、あたたかい、親切な、元気な、明るい、 そそっかしい、がまん強い、勇気のある
「見たり聞いたりして感じたことを相手に伝える言葉」 かんたん、むずかしい、新しい、ふるい、りっぱ、 うつくしい、すばらしい、くわしい、細かい、 -と同じ、-とはちがう
「自分の気持ちを表す言葉」 うれしい、まちどおしい、まんぞく、わすれられない、 おどろいた、かなしい、ざんねん

表4 文章を短くまとめる段階で提示するモデル文

	まとめのモデル文1 (全文穴埋め型)
さけが大きくなるまで	さけは、(川) でうまれてすこしずつ(大きく)なる。そして、(じょうぶに)そだつと海でくらしはじめ、えさをたくさん食べて(りっぱな)大人になり、(ふるさとの川)へ帰ってくる。
ほたるの一生	ほたるは、おすめすが(けっこんする)あい手をさがすために光る。 (夏)にけっこんしためすがうんだ(たまご)から(よう虫)がうまれて、(川の中)で(大きく)なる。(つぎの年の春)、川ぎしに上がって(土の中)で(さなぎ)になり、(夏)には(せい虫)になり、(みじかい)一生をすごす。

( )内は空欄で提示。

#### 4 結果と考察

##### (1) 文章の要点を捉えてまとめる力の向上

単元の終末に児童が書いた「まとめ」を分析した結果が表5に示したものである。

検証授業前には、文章を短くまとめる問題に対して、半数以上が無答もしくは誤答であった。それが、検証授業後には減少した。なお、モデル文提示後は、全ての児童が文章を短くすることができた。

さらに、「自分の考え」を書くことに関しては、第2段階の教材である「ほたるの一生」の学習後は、22人中21名が内容に対して適切な言葉で感想を書くことができた。

文章を短くすること及び「自分の考え」を書くことのどちらにおいても、授業の中で「言葉の系統表」から適切な言葉を選択させた。そのことにより、何を書けば良いのか分からないという児童が減少し、学習後のテストでも無答の児童が減少したと考えられる。

##### (2) 国語の学習に対する意識の変化

表1に示した意識アンケートの結果、次の図1のようになった。

検証授業前の事前調査と授業後の事後調査の結果、全ての質問において、「とてもあてはまる」「だいたいあてはまる」と答えた児童が増加した。そして、「あてはまらない」と答えた児童がいなくなるという結果となった。この結果から、児童の国語の学習全体や各領域の学習に対する苦手意識が改善されてきていることが読み取れる。

表5 単元の終末における「まとめ」の分析

	文章を短くまとめる			自分の考え(感想)を書く		
	正答	誤答	無答	正答	誤答	無答
5月学習時 「すみれとあり」	10人	7人	5人	13人	5人	4人
検証授業教材1 「さけが大きくなるまで」	14人	5人	3人	19人	3人	0人
検証授業教材2 「ほたるの一生」	17人	4人	1人	21人	1人	0人

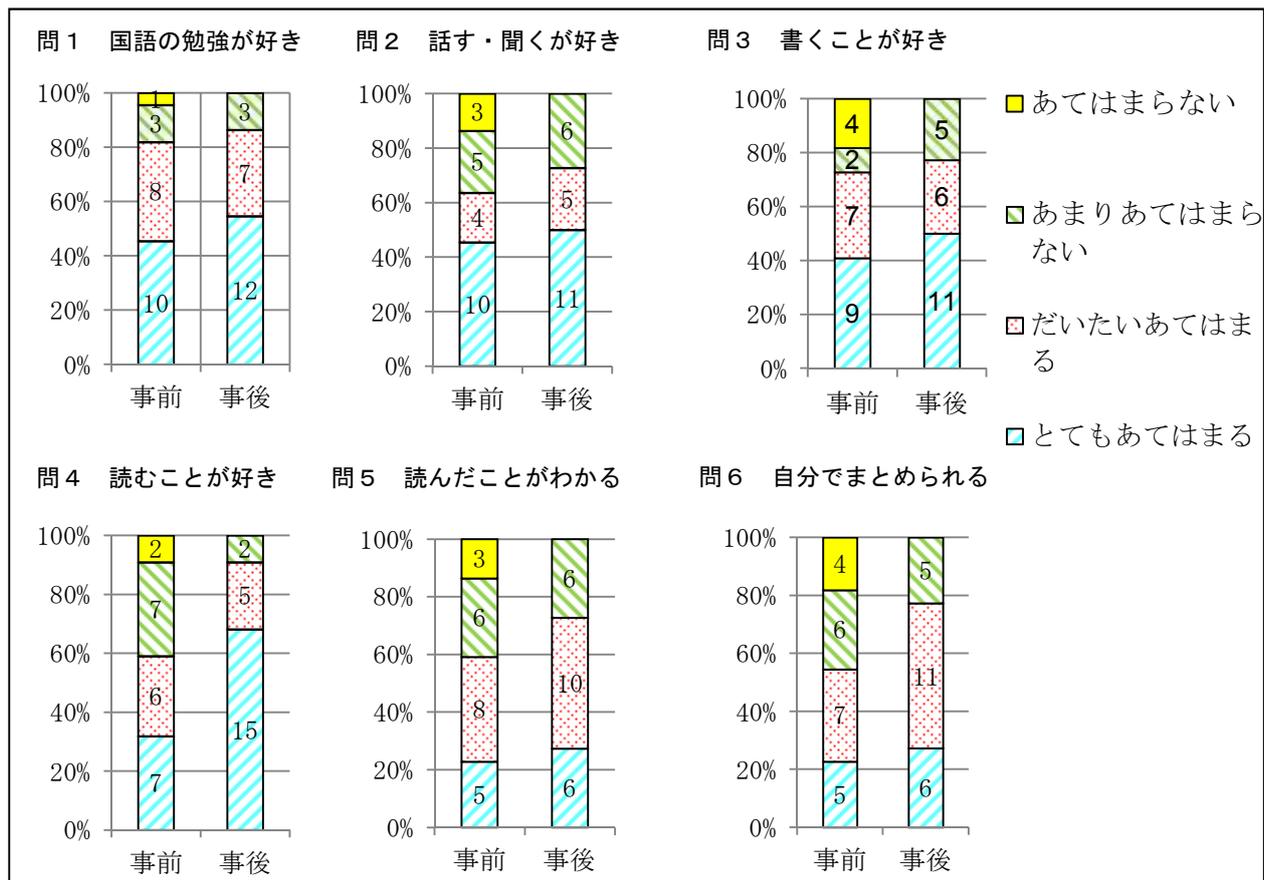


図1 国語の学習に対する意識アンケートの事前及び事後結果集計

特に、本研究において主として取り組んだ「読むこと」領域については、検証授業後は9割の児童が「好き」「だいたい好き」と回答した。その理由をまとめたものが表6である。検証授業実施前には長文読解に対する苦手意識をもつ児童が多かった。しかし、検証授業実施後には、読むことで分かる実感したり、読むことを楽しいと感じたりする児童が増加した。文章の要点を捉えてまとめる力が身に付いてきたことで、国語科の学習全体に対する意識にも良い影響を与えていると考えられる。

さらに「話すこと・聞くこと」「書くこと」においても、「好きではない」と答えた児童はいなくなった。これは、領域間のつながりを意識し、意図的・継続的に指導したことが要因の一つとして考えられる。

## V 研究のまとめ

国語科の読むことの学習において、文章の要点を捉えてまとめる力を育成するために、教科書に示されている各単元の指導事項を他の領域とのつながりが見えるように掲示して意図的・継続的に指導し、読み取った内容及び「自分の考え」を書く際に「言葉の系統表」を活用させた。その結果、次のことが明らかになった。

○「言葉の系統表」を活用させることで、文章を短くし、「自分の考え」を書くとき、適切な言葉を使うよ

表6 「読むこと」が好きであるかの質問に対する回答の理由

	好きではない理由	好きな理由
事前	<ul style="list-style-type: none"> <li>お話を読むのが苦手だから。(4人)</li> <li>長いお話を読むのが面倒だから。(3人)</li> <li>読んであまりわからないから。(2人)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>色々なことがわかるから。(3人)</li> <li>得意だから。(2人)</li> <li>前よりわかるようになってきたから。</li> <li>正しく読めるとうれしいから。</li> </ul>
事後	<ul style="list-style-type: none"> <li>間違えることがあるから。</li> <li>長いお話もあるから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>物語や説明文を読むと、色々なことがわかるから。(7人)</li> <li>読むのが楽しいから。(7人)</li> <li>お話を読むのが好きだから。(3人)</li> <li>色々なお話が読めるから。(3人)</li> </ul>

うになる。

- モデル文を基にしながら，文章を短くさせることで，児童は達成感や満足感を味わい，長文読解に対する苦手意識が減少する。
- 各領域の指導事項を児童にも明確に示すことで，既習の学習内容をそれぞれの領域において活用することができるようになり，年間を通じて各領域で付けるべき力を育成することができる。

## VI 本研究における課題

検証授業を中心とした研究を進めていく中で，「言葉の系統表」の活用により無答の児童が明らかに減少したが，多くの語彙の中から適切な言葉を選ぶことができない児童もいた。そのため，内容には適さない言葉を選択したり，書くことに長い時間を要したりすることがあった。

「言葉の系統表」については，分類の仕方や活用させるタイミングをよく考え，単に与えるだけにならないように，指導者が十分考慮する必要がある。

### <引用文献>

- 1 国立教育政策研究所 2014 『平成26年度全国学力・学習状況調査報告書』
- 2 青森県教育委員会 2014 『平成26年度学習状況調査実施報告書』
- 3 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 国語編（平成20年8月）』

### <参考文献>

- 教育出版 2015 『ひろがる言葉』  
光村図書 2015 『小学校国語』